

あけぼの大豆の概説

平成 28 年 5 月 27 日

JA ふじかわ営農支援課

峡南農務事務所農業農村支援課

1. 歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2. 特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
3. 品種の分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
4. ダイズの生育過程・・・・・・・・・・・・・・・・	3
5. 栽培のポイント・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
6. JA ふじかわ あけぼの大豆 標準防除体系・・・・・・・・	5

あけぼの大豆の概説

JA ふじかわ営農支援課
峡南農務事務所農業農村支援課

1 歴史

南巨摩郡は昔から大豆や小豆等の豆類の作付けが多く、特に良質な大豆が生産できるため、その栽培はとても盛んであったと言われている。あけぼの大豆は旧中富町の在来品種と言われているが、その起源は明治時代頃に関西地方から導入され曙地区で栽培が広がったものとされている。豆がとても大きく、豆粒を10粒並べると6寸（約18cm）になることから、別名「十六寸（とうろくすん）」とも呼ばれている。

昭和45年頃からはエダマメとして、京浜市場へも出荷されるようになった。大豆用に栽培している株から2～3粒揃った良質のもののみを摘み取って出荷を行っているため、大変高い市場評価を受け、エダマメ・大豆兼用利用の栽培が続けられている。

2 特徴

（1）粒が大きい

百粒重：あけぼの大豆 60g ← 通常大豆（30g）の2倍

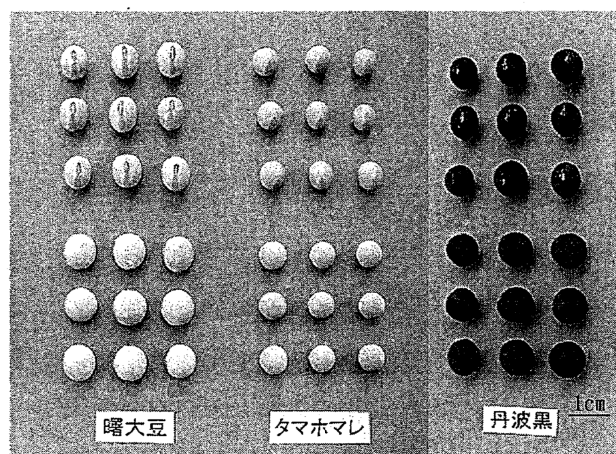


図 「あけぼの大豆」「タマホマレ」「丹波黒」の比較
※ 大粒種として一般的に有名な「丹波黒」に次ぐ大きさ

(2) 糖度が高く、食味が良い

糖含量率 あけぼの大豆 24% ← 通常の大豆(21%)より約1割高い

※タマホマレ22%、丹波黒22%(山梨総合農業技術センター研究報告(2007)より)

(3) 山梨県内における極晩生品種

莢害虫の被害が少なく安定した収量が得られる

→害虫による被害は8月頃がもっと多く、9月以降に莢がつく“あけぼの大豆”

は被害を受けにくい

(4) 旧中富町の曙地区、大須成地区が最適地

- 昼と夜との気温較差が大きく、甘みが増す。
- 山間地域の中でも日当たりが良い。
- 山間地域なので水はけが良いが、霧が多く発生し、乾燥に弱い大豆でも根張りが良くなり、この地域が栽培に適した環境である。
- 他の地域で栽培すると、数年後には「大粒」ではなくなると言われるほど、この地域が適地である。
- 現在は曙地区で収穫された大豆を種子として、広く町内で栽培されている

3 品種の分類

大豆は短日植物であり、基本的に日長が短くなると開花する。ただ、どの程度の短日条件下において開花するかは品種によって異なり、は種から開花するまでの日数とそれ以降成熟するまでの日数によって、9つのタイプに分類される。

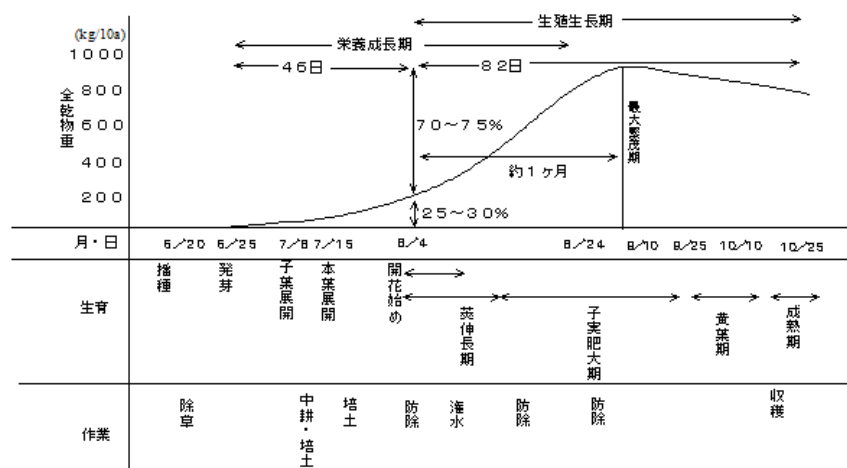
2 ダイズの品種の生態型

	夏 ダイ ズ			中 間 ダイ ズ				秋 ダイ ズ	
	I a	I b	II a	II b	II c	III b	III c	IV c	V c
開花までの 日数	きわめて短い 60日以下		短い 約70日			中くらい 約80日		長い 約90日	きわめて長い 100日以上
結実日数	短い 60日 以下	中くらい 60～ 80日	短い 60日 以下	中くらい 60～ 80日	長い 80日 以上	中くらい 60～ 80日	長い 80日 以上	長い 80日 以上	長い 80日 以上

(福井重郎らによる)

→あけぼの大豆は、“秋ダイズ”のIV cに分類される「丹波黒」並みの晩生品種

4 ダイズの生育過程



- 発芽適温は、30～35℃（15℃以下では発芽遅れや発芽不良となる）
- 開花適温は、25～30℃

5 栽培のポイント（は種～開花前）

（1）ほ場の選定

- 排水が良い…地下水が高いほ場では根の生育が悪くなり収量が低下する
- 耕うん碎土はしっかりと行う（大きな土の塊など無いように）
…細かい粒子でキメが整ったほ場は発芽率がアップ
- 前作の窒素肥料がたくさん残っていないこと
…土壌中の窒素成分が多いと枝葉ばかり大きくなり、収量が低下する

（2）は種

- 播種時期：6月中下旬 標高の高い地域では6月中旬、平坦地では6月下旬
- 曙地区、大須成地区では、昔から「栗の花が咲いたら、は種をする」という播種時期の決定方法が伝わっている。

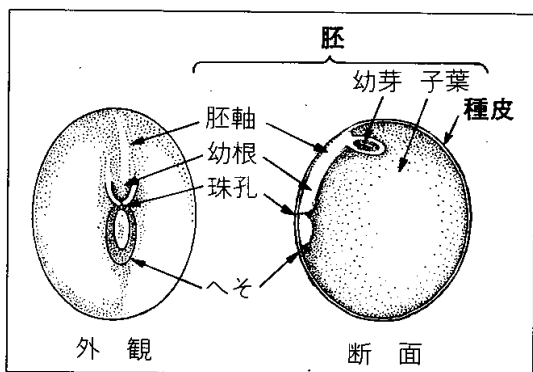


図 6-1 ダイズの種子

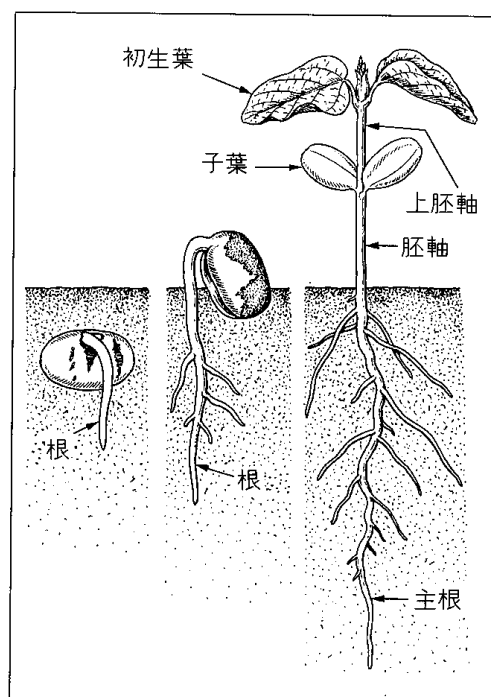


図 6-2 ダイズの発芽

- は種時の注意点

- 適度な土壌水分がある時には種すること
- 鳥類による食害対策として防鳥網等を活用する

- 良い種子を使うこと

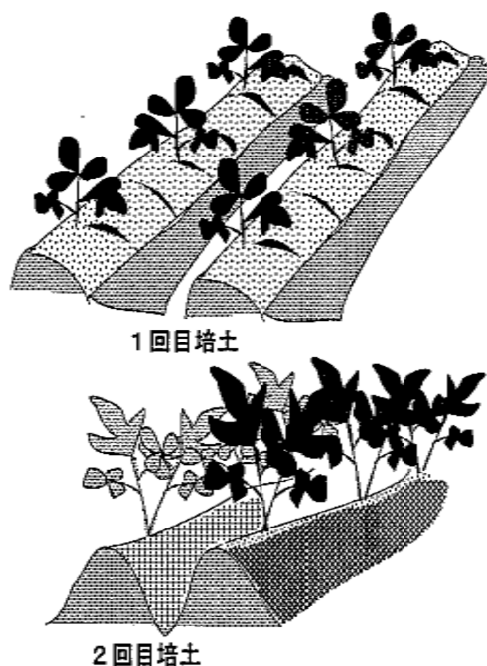
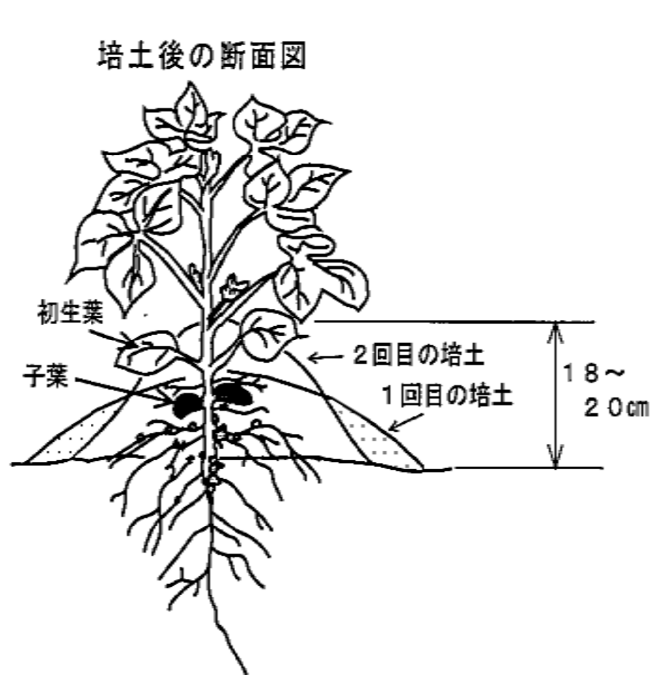
優良な種子を蒔くことがで良い収穫につながる。紫斑粒、褐斑粒は病害が発生しやすく虫害粒は発芽率が劣る傾向があるので、健全な種子をしっかりと種子消毒して使うことが大事。

(3) 除草と中耕・培土

➤ は種後は高温期となり雑草の生育スピードが早いので、大豆の茎葉が繁茂するまでの約1ヶ月間は除草を徹底すること

➤ 中耕・培土の効果～

- 雑草の抑制
- 排水を良くする
- 新根の発生を促進
- 土壌中に空気を入れ、根粒菌※を増やす



※根粒菌（こんりゅうきん）とは？

大豆などの根についている瘤（こぶ）のようなもの。マメ科植物の根に共生して、大気中の窒素をアンモニアに変え（＝窒素固定）、植物の生育に欠かせない窒素を大豆に供給する働きをしている土壌微生物。

6 平成 27 年度 JA ふじかわ あけぼの大豆 標準防除体系

散布時期		開花終期 8 月 30 日頃	左から 7～10 日後 9 月 10 日頃	左から 7～10 日後 9 月 20 日頃	
対象病害虫		ダイズサヤタマバエ等	カメムシ類等	紫斑病・莢汚損症	カメムシ類等
エダ マメ	使用薬剤	スミチオン乳剤	トレボン乳剤	ゲッター水和剤	トレボン乳剤
	倍率	1,000 倍	1,000 倍	1,500 倍	1,000 倍
	収穫前日数※ ₁	21 日	14 日	7 日	14 日
	使用回数※ ₂	4 回以内	2 回以内	3 回以内	2 回以内
対象病害虫		ダイズサヤタマバエ等	カメムシ類等	紫斑病等	カメムシ類等
大豆	使用薬剤	スミチオン乳剤	トレボン乳剤	ゲッター水和剤	トレボン乳剤
	倍率	1,000 倍	1,000 倍	1,000 倍	1,000 倍
	収穫前日数※ ₁	21 日	14 日	14 日	14 日
	使用回数※ ₂	4 回以内	2 回以内	3 回以内	2 回以内

※₁：収穫前日数とは、収穫する日から遡って使用できる日数（期間）を示す。

※₂：使用回数とは、当該薬剤の栽培期間中（土壌消毒などの準備期間を含む）に使用できる総使用回数である。

<参考> あけぼの大豆の病害虫防除の基本

開花終期から子実肥大期にかけて 7～10 日おきに 3～4 回、薬剤散布。

子実肥大期以前はさや害虫の殺虫剤を散布し、子実肥大期には、殺虫剤と紫斑病の殺菌剤を散布。

➤ 殺虫剤

対象害虫：さや害虫（ダイズサヤタマバエ、マメシНКイガ、カメムシ類）

薬剤名（倍率）：スミチオン乳剤（1,000 倍）、トレボン乳剤（1,000 倍）

➤ 殺菌剤

対象病害：紫斑病等

薬剤名（倍率）：トップジンM水和剤（1,500 倍）、ベルクトフロアブル（1,000 倍）

アミスター 20フロアブル（3,000 倍）

ゲッター水和剤（ダイズ 1,000 倍、エダマメ 1,500 倍）